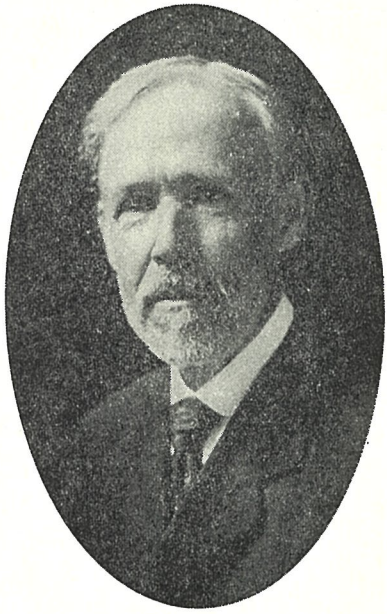


同志社人物誌　(53)

D·W·ラーネッド

竹中正夫

同志社の百年をこえる歴史のなかで、忘れてはならないことは、宣教師たちの貢献である。旧来の因習や伝統的宗教が強い京都にあって、基督教を正面からかかげて学校を設立するということは、比叡山を琵琶湖に移すように不可能に近いことであった。徳富蘇峰の表現を用いれば、「伝染病の看板を掲げて旅館を営むような難事であった。」(『三代人物史』)

新島には、石がねを貫くような強固な意志があり、「山を移すような信仰」のあったことも事実である。しかし、もしも、山本覚馬と宣教師たちの協力がなかったなら、新島がいくら頑張っても、同志社を京都に根づかせ成長させることは、不可能に近いことであった。

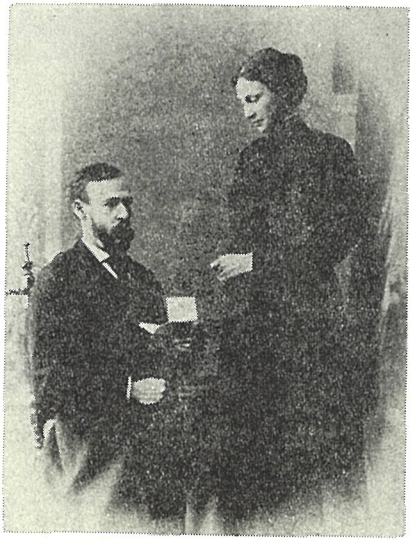
明治、大正、昭和と同志社で働いた宣教師たちの多くは、アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の派遣によるものであった。百数十名に及ぶそれらの宣教師たちのなかで、D·W·ラーネッドはきわめて顕著な存在であった。かつて、同志社の理工学の教育に貢献した中瀬古六郎は、ラーネッドの特色を、同じアメリカン・ボードの宣教師ジェローム・デイヴィスと対比してつぎのようにのべている。

「デイヴィス先生が熱情の権化であり、疾風迅雷であり、狂瀾怒濤でありとすれば、吾がラーネッド先生は、泰然として動かざる山である。雨降らば降れ、風吹かば吹け、ラーネッド先生こそは、千秋万古、高く塵界を抜いて雲外に静立する大岳秀嶺である。」

波瀾曲折、紛糾錯綜の多い同志社の歴史にあって、つねに、天意がこの学園の中にあることを確信し、つぶやかず、諦めず、悠々泰然、自己に托された使命を淡々と果していったのがラーネッドであった。ラーネッドは、明治九(一八七六)年から、昭和三(一九二八)年まで、実に五二年にわたって教育宣教師(educational missionary)として教育、研究に専念して、同志社の発展のために貢献した。

生いたち

ラーネッドは、一八四八年一〇月一二日、米国コネティカット州のカンタベリーに生れ



ラーネッド夫妻

ホイットニー家は、すぐれた学者を輩出した家で、母の兄は著名な地質学者であった。イェール大学が存在する、ニューヘーヴンにゆくと、今日でもホイットニー通りという広い道がある。またイェール大学の体育館や博物館にはホイットニーの名がつけられており、ホイットニー家の人びとの貢献が今日でも記念されている。さらに、ラーネッドの叔父に、国際法学者のT・D・ウールゼー（Theodore Dwight Woolsey）がいた。かれは、イェール大学の学長をつとめたティモシー・ドワイトの甥で、政治学と国際法を専攻し、一八四六年から大学長をつとめていた。現在のイェール大学の講堂は彼の名をとってウールゼー・ホールといわれ、大学創立二〇〇年を記念して建てられたものである。

ラーネッドは、牧師の家に生れ、すぐれた学者たちを輩出した家系をうけついで幼少年時代をすごした。彼は、一八六六年にイェール大学に入学し、一八七〇年に、B・A・の学位をうけて卒業した。この間彼は、学業に励み、課外活動では一年のときはK・Σ・E・（カッパ・シグマ・エプシロン）の結社（Fraternity）に入り、のちには、科学研究のグループに加っていた。そのころのイェール大学の卒業式では卒業クラスを代表して二人の者が挨拶をのべ、その名前は卒業式プログラムに栄誉（honor）として掲げられるならわしであった。ラーネットは、二人の総代の一人となって謝辞（Salutatory Oration）をのべている。なお、そのプログラムによると、のちに米国のすぐれた病理学者となったW・H・ウエルチ（William Hdnry Welch）も同じ卒業クラスの代表者として学究者としての挨拶（Philosophical Oration）を担当している。（D. W. Learned, Memorabilia, Libe in Yale College, 1866—1870）

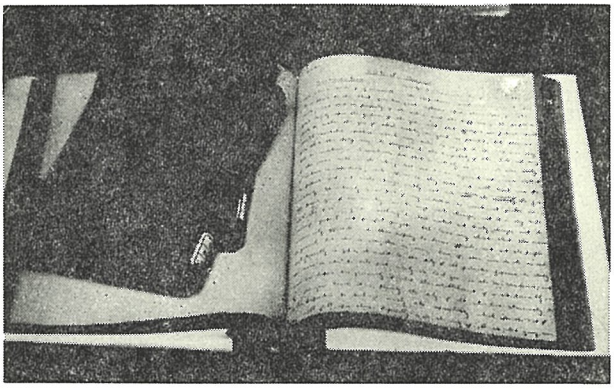
いまだしらざる径をふんで

カレッジを卒業したのち、ラーネットはさらに三年間、イェール大学において叔父にあたるホイットニー教授の指導の下にギリシャ語の研究に専念し、一八七三年に哲学博士の学位をうけ、そのころミゾリー州に新しく設

た。父のロバートは牧師であった。彼の最初の名であるドワイト（Dwight）は、イェール大学の総長をつとめたドワイト（Timothy Dwight）からとられている。すなわちドワイトは、一七九五—一八一七年にわたってイェール大学の総長をつとめた。イェール大学の古いキャンパスの中心に宗教センターがあり、それは、ドワイト・ホールと呼ばれている。祖父のドワイトは、アメリカン・ボードの創設者の一人であった。

ラーネッドのもう一つの名前であるホイットニーという名は、母方からとられている。

けられたセイヤー大学のギリシャ語教授となった。そのころ、アメリカン・ボードは、主として教育に専念する宣教師を日本に派遣するように考え人物を求めていた。ラーネッドはそれに応じ、一八七五年七月七日、フローレンス・H・リハード（Florence Helen Rehad）と結婚をし、一一月一日に桑港を出帆、二三日に横浜に到着。二六日に神戸に着いた。船が横浜に着く日の早朝、呼ばれて甲板へ行ってみると、遙かな水平線上に白雲のように富士山が見えた。これが日本の最初の印象であった。その日は折から新嘗祭の祝日で、家々には国旗が掲げられてあり、あたかも自分たちを歓迎するかのように翻っていたのが印象的であった。（『回顧録』一九八三年、二二―二三頁）



ラーネッド先生の原稿

この年の一一月二九日に同志社は開校したのであるから、ラーネッド夫妻は、すぐにでも京都に飛んで行きたい想いであったにちがいなかった。しかし、当時、外国人は許可なくして内地に旅行出来なかった。その年一二月二八日、旅行券をもらって鉄道で大阪に出て一泊し、翌朝八時小さな蒸汽船で出発し午後四時に伏見に着き、夕方京都に入った。たまたま大阪に来ていた新島襄が同船していた。かれらは、ニューイングランドのこと、京都のこと、そして同志社のことなどを終日船上で語りあったにちがいない。

教育宣教師

初期のアメリカン・ボードは、主として伝道のための宣教師を派遣し、高等教育のために専念する教育宣教師（educational missionary）を派遣していなかった。トルコで伝道に当っていたC・ハムリン（Cyrus Hamlin）は、伝道者養成のための神学校を大学に発展させようとしたとき、ボードの反対にあい、一八六〇年に彼はついにアメリカン・ボードの宣教師を辞職している。一八八五年、中近東に派遣されたJ・L・バートン（James L. Barton）は、高等教育に対してアメリカン・ボードはあまり関心をもっていないと記している。大学水準の高等教育機関を設けることは莫大な費用がかかることであるのみでなく、やがて知識がすすむにつれて信仰を稀薄にする傾向があり、かつて、ボードをささえる多くの人々は、高等教育をうけていない一般庶民たちが多いというのが当時の状況であった。同志社の初期においても、キリスト教に根ざして大学を設立しようとした新島と、同志社を伝道師養成学校として位置づけようとしたボードとの間には可成りの軋轢があった。そうした障壁を亀裂とせずに乗り越えて協力関係へと向わせたところに同志社発展の基盤があっ

ラーネッド先生送別の正午　昭和3年9月15日

(一八七六)年一月の元旦、新島、デイヴィスの両人と連れ立って比叡山に登って想いを新しく、一月三日には、新島襄と山本八重との結婚式に出席した。

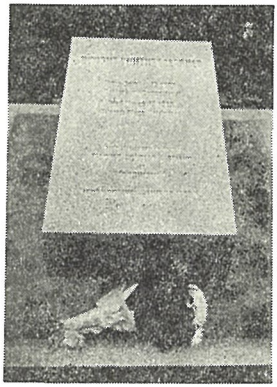
彼は、明治九年四月から、教鞭をとり、昭和三年引退するまで、実に五二年にわたって同志社で教鞭をとった。この間、専門の神学の外に、算術、代数、幾何、三角術、両軸幾何、物理学、天文学、体操、経済学、政治学、ギリシャ語、ラテン語などを教えた。彼自らの回想によれば「フットボールをこの学校に紹介した」(『ラルネデ回想録』五二頁)とあるから、今日ラクビーが同志社でさかんである淵源はラーネッドにまでさかのぼるといえよう。神学の領域では、聖書神学、新約聖書、そして教会史を講じた。とりわけ、教会史は、彼が終始一貫五〇年にわたって講じた科目で、同志社の神学が歴史的研究を中心に発展してきた基礎を築いた。

右手に聖書、左手に経済学

学究としてラーネッドは広い範囲にわたってその博識をもって同志社の教育に貢献したが、とりわけ、彼が力を注いだのは、聖書の研究と経済学の講義であった。

彼はギリシャ語、ラテン語を学び、教会の歴史に通じていたので聖書のなかでも新約聖書の註解書の出版に、精力を結集して励んだ。聖書の翻訳が漸く著についた明治の初期にあって、彼は、新約聖書、二七巻の全巻の註解書を書いて、之を日本語で出版する尨大な計画をたてて、それを徐々に実行していった。年代順に記すとつぎのようになる。

『使徒行伝註釈』(明治一九年)、『黙示録註釈』(明治二〇年)、『以弗所書註釈』(明治二〇年)『路加伝註釈』(明治二〇年)、『馬太伝註釈』(明治二一年)、『帖撒羅尼迦前後書註



ラーネッド先生墓碑

た。そこには、新島の人物と信仰を信頼したボードの姿勢があった。また、意見を異にすることがあっても、祈りにおいて一つであり、たえず新島をたてたデイヴィスの誠実さがあった。そして伝道のみを主張するボードと、聖書を教えてはならぬという京都府との間に板ばさみとなって呻吟していた新島の忍耐があった。

こうした状況の中で、学識豊かなラーネッドが教育宣教師として同志社に着任した意義はきわめて大きかった。ラーネッドは明治九

釈』（明治二一年）、『希伯来書註釈』（明治二一年）、『約翰伝註釈』（明治二一年）、『提摩太前後書、提多書、腓利門書註釈』（明治二二年）、『可林多前後書註釈』（明治二三年）、『雅各役得前後書・約翰一二三、猶太書註釈』（明治二四年）、『羅馬書註解』（明治二五年）、『馬可伝註釈』（明治二六年）、『共観福音書講解』上・下（明治三八年）、『保羅之小書簡講解』上・下（明治四一年）、これらの老大な註釈書を出版しただけでなく、さらに推敲を加え、新約聖書の改訳にともないほとんどにわたって改訂版を出しているのは、驚嘆すべきことである。これらの註解書は地味であるが、原語にかえり史実にてらして着実であり、わが国の初期の新約聖書の参考文献として貴重な役割を果した。大正一二年の関東大震災によって出版元であった警醒社をはじめ、印刷を担当した横浜の福音印刷会社が火災にかかり、書籍はもとより、紙型及び原紙もすべて灰燼に帰した。ラーネッドは、落胆せず、翌年から新しく稿を起して、従前のものよりも簡易なものとして出版をつづけた。

ラーネッドは、経済学を専門に勉強した学者ではなかった。しかし、イェール大学に在学中、学長をつとめていたウールジーから、政治学の講義をきき、近世の社会思想、政治思想について一応の知識をもっていた。彼は請われるままに、同志社で、経済学、政治学の講義をなした。これらの講義は、彼の弟子たちにより訳出され広く紹介された。そのはじめはわが国最古のキリスト教の週刊紙『七一雑報』に、明治一二年から明治一四年にかけて『経済学略説』として連載されたものであった。その後『経済新論』（宮川経輝訳、明治一九年）、『経済学の原理』（浮田和民訳、明治二四年）、などがある。近代の日本経済学説史におけるラーネッドの貢献を高く評価した住谷悦治は、つぎのようにのべている。

「その最初の講義から社会主義、共産主義、無政府主義、に言及し、批判し、なお社会政策についても種々見解を述べている。もちろん博士は基督教徒であるから、社会主義や共産主義には批判的態度であるけれど、これら各社会思想につき相当に詳細な解説をしていることは、日本社会主義思想史の上に特筆すべきことである。」（『ラーネッド博士伝』）

ラーネッドの経済学は主として資本主義の経済の仕組みを分析したものであった。しかし、その中に資本主義の欠陥を指摘し、とくに貧困の問題を具体的に論じていることは注目すべきことである。社会主義や共産主義などの資本主義の欠陥克服の方策を紹介し、その批判をなすとともに、正当なる改良法を得るためには、経済学とキリスト教に根ざした博愛主義の必要なことを論じてやまなかった。同志社で学んだ人びとのなかには、経済とキリスト教の倫理、社会と信仰の関連を自らの生涯において問うた人びとが少くなかった。深井英五、小野英二郎、安部磯雄、徳富蘇峰、岸本能武太、村井知至、浮田和民、油谷治郎七、山川均、高畠素之、松岡荒村、柏木義円、山室軍平、留岡幸助、などをあげることが出来る、彼らは、きわめて多岐な領域で仕事をした人びとであり、その立場もちがっていた。しかし、共通していることは、同志社で学び、ラーネッドに学んだということであった。

エピソード

ラーネッドはきわめて博識であったが、教

室で学生たちから質問されて、知らないことは、「アイ・ドント・ノウ」と平然と答えた。ギリシャの哲人は、「智者は自らがいかに知るところの少きを知る」といった。ラーネッドは、「天地の間、人間の知っていること、誠に僅かであります」とのべ、つねに真理に対する謙虚にして誠実な姿勢をもっていた。

ラーネッドは、自らを省みて、「予は天性、体質虚弱であった」（回顧録』二〇頁）といっている。とくに、大学一年のとき、眼病にかかり、一時中途退学をする悲劇を経験した。彼は、規則正しい生活をして、弱かった体を訓練した。毎日時間をきめて散歩をしたことは有名な話である。京都の町の人々が、ラーネッドが散歩するのをみて、時間を知ったという話も伝えられている。

留岡幸助が、同志社を出て間もなく、ラーネッド宅を訪問し、歓談していた。しばらくたって、ラーネッドは、ランプを手にして、玄関の方に歩みながら、「もう私の勉強時間になりました」といって、留岡を送り出して机にむかったという。ラーネッドの尨大な著述は、強い集中心の賜物であると共に、規則正しい生活の産物であると思う。

大正から昭和のはじめにかけて、同志社の神学科では卒業のときに記念写真をするならわしがあった。ある年の写真をよくみると、ラーネッドは、本を読んでいた。これも時間を大切にした彼の一面をあらわしている。

ラーネッドは謹厳寡黙にして学究的な人であったが、暖かい心の持主で、ソーッと困っている学生をたすけ、それも依存心をおこさないように配慮しながら援助した。のちにサンフランシスコの三井物産で有力な働きをした内田堯が同志社で苦学していたとき、その母かつを家事手伝いとして迎え、「天は自ら助るものを助く」といって励まし、晩年に至るまで美しい師弟関係をもちつづけたのは、代表的な例である。

同志社の精神

同志社の創設期から、明治・大正・昭和にかけて、五二年の長きにわたって同志社で働いた学究的宣教師ラーネッドは、ある点からいうなら、女子部のミス・デントンとならんで同志社の精神を象徴したような存在であった。彼が、昭和三年九月一五日京都をたって帰米の途についたとき、同志社人のなかには、別れを惜しむおもいがひときわ深かった。彼は、いわば同志社の精神を身に体して半世紀生きつづけた人であった。明治三〇年代に徴兵猶予の特典をうけられるかどうかを苦慮して、同志社の綱領からいわゆるキリスト教の条項を削除し、内外から批判をうけたことがあった。四国からはせつけた宣教師が基督教を破棄するような同志社は壊してしまえとまで極言した。ラーネッドは、静かにしかし凛然と「なに同志社が基督教をすてた。この通りあるぢゃないか」といって机上の聖書に手をおいたといわれている。（『同志社五十年裏面史』二九〇頁）彼は、同志社の迂余曲折にあって、つねに泰然と「見えざる御手の導き」を信じていた。

一九四三年三月一九日、九五歳の長寿を全うし淡々たる生涯を了えた。その分骨は、若王子の同志社墓地に埋葬され、一九六五年一一月二九日の創立記念日に墓石の除幕式が行われた。その墓碑にはつぎの文字がきざまれている。"Learn to Live and Live to Learn"

（本文中ラーネッド『回顧録』とあるのは、一九八三年、その永眠四〇周年を記念して、ラーネッ

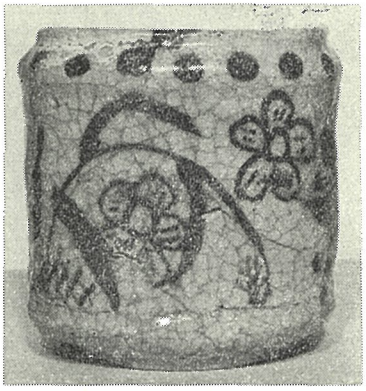
ドが同志社引退にあたって『同志社新聞』に寄せた文章にあわせて、他の文章とともに、河野仁昭氏が編集し、学校法人同志社が出版したものである。）

（大学神学部教授）

同志社校地出土の埋蔵文化財 (5)

鈴木　重治

絵志野四方向付



同志社女子大学図書館地点出土（江戸時代初期）
口径八・五㎝、器高九・三㎝、底径六・三㎝

当資料は、土師器の皿などを伴って、石積みの地下式貯蔵庫から出土したものである。石塔や墓石を転用して側壁とした地下式貯蔵庫は、東福門院の下屋敷に属したものと考えられている。宮内庁諸陵部で保管する寛永十四年（一六三七）の洛中絵図にみえる御国母様下屋敷がこれにあたる。

伴出の土師皿の型式上の特徴は、内底面と体部の境に、弱い段を残しながら、入念なヨコナデ調整を明瞭に認める点にある。胎土も密で、焼成も良好である。見込に深い沈線を篦によってめぐらす技法が出現する以前の一群である。したがって、考古学的な土師器の編年研究の成果に照しても、一七世紀の前半に年代が与えられることになる。

ゆるやかな起伏をみせる筒形の胴部は、適度な腰の張りによって安定観を与えている。透明の長石釉が器の内外にたっぷりとかけられていて、釉下に描かれている鉄絵は、体部をめぐって梅花文、千鳥文、草文などが、稚拙ながら雅味のある筆致でしたためられている。内底面には、四ヶの目跡が残り、重ね焼であることを示している。また貫入も多い。

史跡に指定されている岐阜県の元屋敷窯址から、同様の向付が多量に出土していて、生産窯址の想定も容易である。美濃産の陶磁器は、近世初頭から大量に京都に搬入されているが、それらの中でも、とりわけてすぐれた出土資料の一つといえよう。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）